

『逍遙遺稿』札記

——香奩体の影響について——

一

明治二十八年(一八九五)六月、その年の正月に文科大学の教授や学生らによって創刊された「帝國文學」の第六号(雑報)欄に無署名の「明治の漢詩壇」と題する記事が掲載された。

この記事は、その年の十二月、同誌第十二号に載せられた大町桂月の書評「逍遙遺稿を讀む」や「日本人」第十一号、十二号に発表された田岡嶺雲の「多愼の詩人故中野逍遙」に先んじて、逍遙の詩業を高く評価しているもので、冒頭にまず漢詩壇の現状について、江戸末期からの史的展開を簡潔に示し、ついで現今の詩人に対する批評を加えている。

すなわち、その源流を玉池吟社を開いた梁川星巖(寛政元年「一七八九」)〜安政五年「一八五八」に求め、星巖のもとから小野湖山(文化十一年「二八一四」)〜明治四十三年「二九一〇」・大沼沈山(文化十五年「二八一八」)〜明治二十四年「一八九二」・岡本黄石(文化

二 宮 俊 博*

八年「二八一」)〜明治四十三年「二九一〇」・森春濤(文政二年「一八一九」)〜明治二十二年「一八九八」)が派生したものの、詩壇の主流となったのは春濤で、その門下が隆盛を誇っていることを述べ、「気魄」「気格」を重視する観点に立って、当時の詩人中、国分青厓(安政四年「一八五七」)生まれ、当時三十九歳)をかなり評価し、一々学人こと副島種臣(文政十一年「一八二八」)生まれ、六十八歳)、本田種竹(文久二年「一八六二」)生まれ、三十五歳)の名を挙げるのに対して、星社の森槐南(文久三年「一八六三」)生まれ、三十三歳)・野口寧齋(慶応三年「一八六七」)生まれ、二十九歳)については、その詞藻の美を認めながらも、気骨に缺け高次の韻致に乏しいとみなしており、大江敬香(安政四年生まれ、三十九歳)・杵山衣洲(安政二年「一八五五」)生まれ、四十一歳)などは第二流以下だと一蹴している。

ちなみに、槐南や寧齋に対して、さらに強い口調で難じているのが、桂月の「逍遙遺稿を讀む」で、「今の詩人たるものは、徒に詞を弄するのみ」で「毫も生色あるを見ず」、「權に媚ひ、世に阿り、

胸中一片の赤誠なく、國家の何物たるを解せず、美の何物たるをも解せず、血なく、涙なく、徒に支那人の口眞似して、陳腐相襲ぎ、浮華輕佻、人をして嘔吐を催さしめむとす（圈批点は省略）と断じ、また「多憾の詩人故中野逍遙」を書いた嶺雲も、漢詩壇で牛耳を執る槐南たちに批判的であつた。

そしてその後半部には、前年の十一月十六日急性肺炎に罹り忽焉として逝つた中野逍遙を取り上げ、

予輩は記して此に至り、亡中野逍遙を憶うて、覺えず流涕大息に堪へざるものあり。彼は明治の文壇に向て未だ詩人の名なし。然れども詩人の資なくんばあらず。惜むらくは桂蘭早く秋風に摧けて、無情の坏土空しく未死の魂を埋め了んぬ。彼は實に夭折せり。隨て其詞句未だ圓熟渾成の域に臻らざる者ありと雖も、彼が才情と氣魄とは竟に掩ふべからず。彼は血あり、涙あり、多情多恨の才子にして加ふるに稜々たる氣骨を以てす。是を以て、花を見て泣き、鳥を聞きて泣き、佳人に對して泣

き、國家に對して亦泣くなり。其骭髀不平の餘發して詩文となる者、皆才情躍々として逸氣掬すべく、首々多くは咄嗟の作なれど詞藻秀麗を極はめ、陳腐露骨の嫌なく、玲瓏として玉の如く、高大縱横の筆致更に天馬空に行くの觀あり。其才筆既に獲易からず、而して其毫も輕佻浮華の氣なく、忠厚沈摯にして纏綿たる情緒あるは、絶えて滔々たる現代の俗詩人の比すべきものあらず。強ひて前人に比せば、其れ久能山頭に『鐵槌難入九泉底、此是祖龍埋骨山』と大喝して、而かも比翼塚に幾斛の涕涙を灑ぎし松本奎堂乎。はた、三叉江上に『鬢髮在手亂如糸、木蘭舟中斬蛾眉』と哀吟して、而かも忼慨悲歌の作多かりし山田蠖堂乎。要するに逍遙が未だ熟成せざりし詩篇は、大詩人た

るの伎倆を示すに由なるべし。然れども、彼が才情と氣骨とは、眞に當世の俗詩人の上に出づ。聞説らく、世に出さずして空しく筐底に取めたりし彼が遺稿は、頃者其親友の手に由り、梓に上りて同人の間に頒たれむとすと。斯道に熱心なる者幸に一讀して、俗詩人の蠢動する明治の詩壇にも、血あり涙あり而かも才情絶世なりし厭世的の青年詩人ありしを知れ。

と述べている（圈批点は省略）。「才情と氣骨」を有し、己が真情を綿々切々と吐露した逍遙を「現代の俗詩人」からはるかに抜んでた存在だとみて高く評価し、その早逝を痛嘆しているのである。

この「明治の漢詩壇」という一文は、おそらく「帝國文學」編輯委員の手になるものであろう。そうすると、その顔ぶれからしてこれも桂月が執筆した可能性が高いように思われる。

二

さて、ここに「強ひて前人に比せば」として挙げられている前代の詩人のうち、奎堂松本衡（字は士権、天保二年〔一八三二〕〜文久三年〔一八六三〕）は三河刈谷の人。若くして昌平黌に学んだ逸材で（同学に岡鹿門・松林飯山のほか、重野成齋らがいる）、尊皇攘夷の志に燃え天誅組蹶起の首謀者の一人として大和の五条で若い命を散らした。その詩は明治二年（一八六九）に刊行された『奎堂遺稿』二卷に収む。なお、奎堂が名古屋で開いた塾で教えを受けた者のなかに、後に森春濤門下の四天王の一人に数えられる丹羽花南（名は賢、弘化三年〔一八四六〕〜明治十一年〔一八七八〕）がおり、『奎堂文稿』を編んで明治四年に上梓している。

奎堂が東照宮のある「久能山」を詠じた二首は、安政五年（一八

五八)の作で、其二に次のように云う。

石磴盤回老樹間 石磴盤回す老樹の間

此中何事設重関 此中に何事ぞ重関を設くる

金槌難入三泉底 金槌入り難し三泉の底

知是祖龍埋骨山 知る是れ祖龍骨を埋めし山

〔石磴〕は、石段。〔金槌〕は、韓の公子であつた張良が亡国の恨みを晴らすため、ハンマー投げの力士を雇つて博浪沙で秦の始皇帝狙撃を図つた故事(『史記』留侯世家)を踏まえる。〔三泉〕は、地下。〔祖龍〕は、始皇帝のこと(『史記』始皇本紀)。ここは、借りて徳川家康を指す。

一方、「比翼塚」は、安政四年の作で、目黒不動尊の仁王門近くある平井権八とその恋人小紫の塚を詠じたもの。

比翼鳥 比翼の鳥

翼難比 翼比し難し

雌未死 雌未だ死せざるに

雄先死 雄先に死す

菱花生塵鸞影孤 菱花塵を生じ鸞影孤なり

精衛無力填海水 精衛海水を填むるに力無し

華貌忽萎三尺霜 華貌忽ち萎る三尺の霜

嬌血痕古土花紫 嬌血痕古り土花紫なり

生縦暫別死同穴 生きて縦ひ暫し別るるとも死せば穴を同じ

比翼塚存目黒里 比翼の塚は存す目黒の里

空林月白語嚙嚙 空林月白く語ること嚙嚙

初或如怨後如喜 初めは或いは怨むが如く後には喜ぶが如し

芳魂相依兩不消 芳魂相依りて兩ながら消えず

情死之情何時已 情死の情何れの時にか已まん

風俗日淫靡 風俗 日に淫靡

鯛誓多難待 鯛誓多く待み難し

死者若有知 死者若し知ること有らば

應笑人情薄於紙 應に笑ふべし人情紙よりも薄きを

〔比翼鳥〕は、雌雄それぞれ一目で片翼しかないが、合して一体となつて飛ぶという。中唐・白居易の「長恨歌」に「天に在りては願はくは比翼の鳥と作らん」と歌われ、男女の深い契りの象徴。〔菱花〕は、鏡。〔鸞影〕の語は、その昔、鸞が鏡に映つた己れの姿を見て哀鳴して息絶えたという、六朝志怪小説の『異苑』に見える話に基づく。〔精衛〕は、鳥の名。炎帝の女が東海に溺死して化して精衛となり、西山の木石を銜えて東海を填めんとしたという。もと、『山海経』北山経に見え、晋・陶淵明の「山海経を読む」十三首其十に「精衛は微木を銜へ、將に以て滄海を填めんとす」と。〔三尺〕は、剣のこと。〔土花〕は、苔。〔嬌血〕は、美しい女の真赤な血潮。〔嚙嚙〕は、ささやくさま。〔鯛誓〕は、墨書きの誓詞。鯛は、鳥賊のこと。

また山田蟻堂(享和三年「一八〇三」)久文元年(「一八六一」)の「三叉江」詩(『蟻堂遺稿初集』卷二)は、己れになびかぬ二代目高尾を仙台侯伊達綱宗が大川の三つ又に浮かべた舟の中で殺したという歌舞伎の「先代萩」で知られる話柄を題材に詠じられている。

贖佳人 佳人を贖ふ
佳人贖す 佳人贖す
大守暝 大守暝る

妾身任君殺 妾が身は君の殺すに任す
妾身任君活 妾が身は君の活かすに任す

妾身已有五郎在

妾心不可奪

鬢髮在手亂如糸

木蘭舟中斬娥眉

遺恨不知深幾尺

三叉之水終古碧

妾が身に已に五郎の在る有り

妾が心奪ふ可からず

鬢髮手に在り乱れて糸の如し

木蘭舟中 娥眉を斬る

遺恨は知らず深さ幾尺

三叉の水 終古碧なり

蠖堂、名は政苗。米沢の人。古賀侗庵（天明八年〔二七八八〕〜弘化

四年〔一八四七〕に師事し、昌平黌に学んだ。上山藩に招かれ藩政

改革の実を挙げたが、嫉視するものあり、米沢に帰った後、禁錮せ

られ病を得て歿したという。慶応三年（一八六七）刊の『蠖堂遺稿

初集』三巻がある。戊辰のおり、それぞれ米沢藩のために周旋奔走

し、やがて新政府に徴用されたものの、その後の命運を異にするこ

とになる雲井龍雄（天保十五年〔一八四四〕〜明治三年〔一八七〇〕

や宮島誠一郎（天保九年〔一八三八〕〜明治四十四年〔一九一三〕）は

その門に学んだことがあった。注なお、天保六年（一八三五）生まれ

の信夫恕軒によれば、幼年の頃、頻りに書生がこの詩を伝誦してい

たと云う（明治二十五年刊、『恕軒漫筆』巻上）。

ちなみに、蠖堂にも「比翼塚」と題する詩（『蠖堂遺稿初集』巻

一）があり、また奎堂にも「三叉行」と題する作（『奎堂遺稿』巻

一）があるが、ここで後者を挙げておく。

五湖煙水春不春

雙蛾欲蹙意先顰

肝肺蓄火醉大守

雲鬢十八綠滿手

玉碎花飛風色愁

血漾猩紅凝不流

五湖の煙水 春も春ならず

双蛾蹙めんと欲し意先づ顰む

肝肺火を蓄ふ醉大守

雲鬢十八 緑手に満つ

玉碎け花飛び風色愁ふ

血は猩紅を漾はし凝つて流れず

象櫛金釵竟何用

波底長沈紫小鳳

松媒磨盡滴香淚

蘭窓夜結相思字

潛托了鬢寄情人

彈指幽明路已異

孤魂俚俚無所依

冥漠悠遠不得歸

魚龍夜泣空江雨

碧燐團團出水飛

（五湖）は、中国では太湖もしくはその附近を指すことが多いが、

こは三つ又をそれに見立てる。（双蛾）は、蛾眉。（雲鬢）及び

（緑）は、黒髪。（猩紅）は、猩々の顔のような紅色。（紫小鳳）は、

小紫のことを中国風にいう。（松媒）は、墨。（香淚）は美人の涙。

（蘭窓）の語は、初唐・駱賓王「帝京篇」（『唐詩選』巻二）に見え

るが、こは女のいる部屋の窓をいう。（了鬢）は、揚げ巻に結つ

た髪。まげ。（彈指）は、瞬刻。（俚俚）は、どこにゆけばよいのか

わからぬさま。『札記』仲尼燕居に「俚俚乎として其れ何に之か

ん」と。（冥漠）は、あの世。（碧燐）は、青白い鬼火。

山田蠖堂や松本奎堂は、あるいは藩政の改革を志しあるいは時代

の改革を夢みながらいずれも途半ばにして斃れたが、中野逍遙の詩

句を借りて言えば「豪俠の気は兒女の情を兼ね」（『逍遙遺稿』正編

「偶成」五首其三）る者であったのである。

三

ところで、『奎堂遺稿』（卷上、丁巳之上）には、安政四年（一八五七）作の「香奩十首」と題する詩があつて、その五首が節録されている。「香奩」とは、化粧道具をいれる小箱のことで、もっぱら女性の姿態や閨怨の情、それに狭斜の巷での色恋を詠ずる艶冶な詩を香奩体と称した。その名称は晚唐・韓偓の『香奩集』に由来するものである。

其一

銷金帳裏語低低 語低低

漫笑自家做小妻 漫りに笑ふ自家は小妻と做ると

曾許檀郎情一片 曾て檀郎に許す情一片

淫他三十六瓠犀 淫他す三十六瓠犀

（銷金帳）は、金糸で織ったきらびやかな帳。ここでは妓楼のそれ。

例えば、南宋・汪元量「湖州歌」九十八首其四十五に「銷金帳下忽

ち天明け、夢裏無情亦た有情」と。（低低）は、ひそひそと。例え

ば、五代・李煜「蝶恋歌」詞に「誰か秋千に在る、笑裏低低と語

る」と。（自家）は、己れ。唐代からの俗語。（小妻）は、妾のこ

と。（檀郎）は、美男子で知られる西晋・潘岳が小字を檀奴といっ

たことから、愛する男のことをいう。（淫）は、お歯黒で染めるこ

と。（他）は、動詞の接尾語的に用いられる。唐代からの用法。其

四の看他も同じ。但し、江戸明治期には、下の名詞に冠して「他の

くを」と訓じられている。（瓠犀）は、美しい歯の喩え。『詩経』衛

風・碩人に「齒は瓠犀の如し」とあり、朱子の集伝に「瓠犀は、瓠

中の子。方正潔白、而して比次整齊なり」という。

其二

番番情和軟於絲 番番情和して糸よりも軟らかく

一雨一雲誰耐痴 一雨一雲 誰か痴に耐えん

滑脱金釵曾不識 金釵を滑脱するも曾て識らず

鴛鴦被上夢春時 鴛鴦被上 春を夢むる時

（番番）は、一回一回。（軟於絲）の語、中唐・白居易がその家妓を

詠じた「楊柳枝詞」のなかに「一樹春枝千万の枝、金色に嫩えて

糸よりも軟らかし」とある（『太平広記』卷一九八に引く晚唐・范

攄「雲溪友議」。孟棻「本事詩」事感篇にも見える）。ここでは女の

しどけない姿態を指してかく言う。（一雨一雲）は、男女の交情を

いう常套表現。簪が布団に落ちてしまつた気がつかないのであ

其三

一場殘醉尚醺然 一場の殘醉 尚ほ醺然

絃索寥寥午夜天 絃索く寥寥 午夜の天

倚着欄干人未睡 欄干に倚着して人未だ睡らず

海棠枝上月如煙 海棠枝上 月 煙の如し

（午夜）は、午前零時。真夜中。（倚着）は、よりかかったまま。

其四

骨憶魂驚難奈何 骨憶ひ魂驚くも奈何ともし難し

深情一點寄秋波 深情一点 秋波を寄す

看他匿蕙含蘭處 看他す蕙を匿し蘭を含む処

却勝喃喃話説多 却つて勝る喃喃話説の多きに

（骨憶魂驚）の語、梁・江淹「別れの賦」（『文選』卷十六）に「別

れ有れば必ず怨む。人をして意奪ひ神駭き、心折れ骨驚かしむ」

と。（秋波）は、流し目。（蕙蘭）の語、例えば五代・孫光憲「更漏

子]（『花間集』巻八）に「雲雨の態、蕙蘭の心、此の情江海より深し」とあり、女性の真情をいう。〈喃喃〉は、小声で語らうさま。

其五

一場綺夢忽驚回

酒暈鉛痕総恨媒

頼有嫦娥憐寂寞

夜深悄地入窓来

（酒暈）は、酒気が抜けず、まだ顔がほんのり赤いこと。例えば、

北宋・蘇軾「紅梅」三首其一に紅梅を美人に見立てて「酒暈端無くも玉肌に上る」と。〈鉛痕〉は、化粧を落としたつもりでも、白粉が残っていること。〈恨媒〉は、恨みのたね。〈嫦娥〉は、月の異称。〈悄地〉は、こっそり。口語的表現。

これら奎堂の作は遊里を舞台にした情痴の作であるが、こうした香奩体など艶詩は、後述するように明治の漢詩壇でも大いに流行していた。

かかる香奩体の艶詩と中野逍遙の關係について、つとに中村忠行氏が『近代日本文学辞典』（東京堂出版、一九五四年）において「彼は作法において良師好友を得ず、独り李杜の詩、韓偓が香奩体の艶詩などに親しみ、傍らシルレルの詩を愛誦して、その真髓に触れることに努めたが、却つてこれは幸したようである」と指摘され、続いて村山吉廣氏も『日本近代文学大事典』（講談社、一九七七年）の中野逍遙の項で「杜甫や宋の邵康節の雄渾で沈痛な詩風を慕うとともに唐の韓偓の香奩体の艶詩からも多くを学んでいる」と述べておられる。さらに、中村氏が担当された神田喜一郎編『明治漢詩文集』（明治文学全集62、筑摩書房、一九八三年）の詩人小伝や村山氏の『漢学者はいかに生きたか—近代日本と漢学—』（大修館、一九九

九年）にも、それぞれ同様の見解を披瀝するほか、三浦叶氏も「逍遙は唐の韓偓の香奩體の詩（婦女の媚體とか閨怨の情を叙す艶體の詩の一種）を學び、之に西歐の近代詩から得た自由な詩想を混じえ、獨得な詩境を開いた浪漫的な詩人」（『明治の漢學』第二部第一章、汲古書院、一九九八年）と評しておられる。

もつとも、逍遙が韓偓の香奩体の艶詩に親しみ多くのものを学んでいるとするのは、いささか偏頗で誤解を生じやすい言い方のように思われる。もとより『香奩集』を読んでいたこと自体を否定するわけではないが、それよりも韓偓に始まる香奩体などの艶詩から影響も見られるとするのが穩当で、当時の詩壇の風潮からして首肯けるのではないか。次に、その点をもう少し詳しく見てゆきたい。

四

明治十年代における香奩体流行の一端ならびにそれが読者の支持を得ていた事情については、森鷗外が明治四十四年（一九一）九月から大正二年（一九一三）五月まで「昴」に連載した『雁』のなかで、明治十三年（一八八〇）のこととして「僕」の友人で一学年若い「岡田と云ふ學生」について「岡田が古本屋を覗くのは、今の詞ことばで云へば、文學趣味があるからであつた。併しかはまだ新あらたしい小説や脚本は出てゐぬし、抒情詩では子規の俳句や、鐵幹の歌の生まれぬ先であつたから、誰でも唐紙に摺つた花月新誌や白紙に摺つた桂林一枝のやうな雑誌を讀んで、槐南、夢香なんぞの香奩體の詩を最も氣の利いた物だと思ふ位の事であつた。僕も花月新誌の愛讀者であつたから、記憶してゐる」と回想していることから窺えよう。

但し、鷗外のいう香奩体とは、後出の竹枝なども含んで広く艶治な詩を指すのであろう。「花月新誌」の中から試みに上夢香（名は真行、嘉永四年「二八五二」）と昭和十二年「一九三七」の七絶を例に挙げると、「小湖雜詩三首」其一（第二十号、明治十年八月十六日）には、夜露にぬれながらぼつねんと蓮の花を眺める美人の姿が次のように詠じられている。

絃聲細々阿誰家 絃声細々 阿誰の家

月氣如烟籠淺沙 月氣烟の如く淺沙を籠む

涼露滿身人獨立 涼露滿身 人独り立ち

小西湖上看荷花 小西湖上に荷花を見る

詩題の〈小湖〉は、結句の〈小西湖〉と同じで、不忍池を中国風に称したものの。江戸後期からの詩的スポットで、その蓮の姿は好んで詠まれた。（阿誰）の阿は、接頭語。承句は晩唐・杜牧の「秦淮に泊す」詩の「煙は寒水を籠め月は沙を籠む」を踏まえる。

また「失題」詩（第二十五号、明治十年十月六日）には、屋形船の中で寄り添う男女を描いて、

水禽憂々掠船鳴 水禽憂々船を掠めて鳴く

短夢醒來何限情 短夢醒め來たる何限の情

一點秋燈兩人影 一點秋燈 兩人の影

妙蓮香裏話三生 妙蓮香裏 三生を話す

と詠じられている。

ちなみに、明治二十五年（一八九二）生まれの芥川龍之介が大正九年（一九二〇）十一月、新潮社の文藝誌「文章俱樂部」に「漢詩漢文を読んで利益があるかどうか？」という問いかけで始まる「漢詩漢文の面白味」という文章を寄稿しており、そのなかに、「漢文漢詩は一樣にみんな極大雜把な枯淡の文字のやうに思はれてゐる」

が、「しかし實際は大雜把どころか、頗る細な神経の働いてゐる作品も少くない」として、明・高青邱の「林下」と題する五絶を挙げた後、次のように述べている箇所がある。

それから抒情詩的な感情は、漢詩に縁が薄いやうに思はれてゐるが、これ亦必しもさうではない。名高い韓偓（唐）の『香奩集』と云ふ詩集は、殆どこの種の詩に充滿してゐるが、その中から一つ引くと、「想得たり」と云ふ七言絶句に、

寒食の花枝、月午の天

嬌羞、肯じて鞦韆に上らざりしを。

と云ふのがある。羞ぢてブランコに上る事を承知しなかつた少女を想ふ所なぞは、殆生田春月君の詩の中にも出て來さうである。（序ながら云ふが『香奩集』の中には、「手を詠ず」と云ふ、女の手の美しさばかり歌つた詩がある。如何にも凝つたものだから、暇な方は讀んで御覽になると好い。）

この一節を、森鷗外が自身の文学体験をもとにして述べている先の「雁」のそれと比べてみると、鷗外がわが国の漢詩について記し芥川が中国のそれを主として論じているという違いはあるけれども、僅か四十年ほどの間に漢詩に対する世間の認識が大いに様変わりしていることがわかる。「十七八の頃」に「香奩體と稱する支那詩中の美麗なる文字が何れだけ私の心を魅したのであらう」（下谷の家、明治四十四年二月「三田文學」第二卷第二号）と回想している明治十二年（一八七九）生まれの永井荷風のような人は特殊な例外ではなかつたであらうが、やがて明治が終わって大正も半ばを過ぎると、一般の読者にとつて漢詩はどれも「極大雜把な枯淡の文字」

のようにしか思われなくなっていたらしい。

それはともかく、明治の漢詩壇では、森春濤が七年十月に名古屋から東上し下谷は摩利支天の傍らに居を構えて以降、清新な詩風とともに政府高官を取り込んだ巧みな詩社運営によって、その主導権を握り、ついで子の槐南がその門下に年若い幾多の才俊を擁し、華々しい活躍を見せていた。小野湖山が明治八年作の「森春濤が蓮塘詩の後に題す」詩（明治十年刊『湖山近稿』巻一）において、

千古香奩韓渥集 千古香奩韓渥「偃」の集

繼之次也竹枝詞 之に繼ぐ次なるや竹枝詞

兩家以外推妍妙 両家以外 妍妙を推す

一種森髻艷體詞 一種森髻艷體の詞

と評しているように、春濤は香奩体や竹枝体を継承した優美繊細、艶治柔弱な詩風を得意とし、それが一世を風靡したのである。^{（注1）}明治十七年に上京した中野逍遙の場合、その十年にわたる東京での生活において当時の漢詩壇と交渉を持った形跡は窺えないのだが、さりとて、こうした詩壇の風潮に全く無関係無関心であったとは思われず、ある程度は自然と影響されているとみるべきであろう。

『逍遙遺稿』には、明治十九年から二十一年までの間に作られた「無題」詩（正編）があり、思春期の少女の可憐なしぐさを詠じて、次のようにいう。

綠鬢梳兮翠眉染 綠鬢 梳り翠眉染む

羞向鏡臺照半面 羞づ鏡台に向つて半面を照らすを

手把金釵插鬢邊 手に金釵を把つて鬢辺に挿む

捲簾未倚玉欄干 簾を捲いて未だ倚らず玉欄干

玉欄干外薔薇發 玉欄干外 薔薇発ぎ

飄搖晚風散奇辭 飄揺たる晚風奇辭を散らす

花迎風々戲花

花枝隨風橫復斜

妬殺造物弄婁娜

起折庭花擲一朶

再拾落片笑相看

猶憐清芳似郎顏

猶ほ憐れむ清芳の郎が顔に似たるを

〔奇辭〕は、バラの強く芳しい匂い。〔妬殺〕の殺は、意味を強める助字。〔造化〕は、万物を生育する自然のことで、神さまの意。〔婁娜〕は、双声の語で、たおやかなさまをいう。〔憐〕は、いとおしく思うこと。〔郎〕は、好いた人、いとしの君。

「無題」と題する詩は、晩唐の李商隱に始まり、一世代後の韓偓などに受け継がれるが、この詩などは香奩体だと言ってもよからう。^{（注2）}

このほか逍遙には「竹枝に擬す」（正篇）と題する明治二十三年作の七絶四首がある。

其二

洛陽美女趙飛燕

學畫鴉黃未巧妍

呼來同伴誇佳福

一股寶釵三百錢

〔趙飛燕〕は、漢代の美女の名。歌舞を学び、身のこなしの軽いことから飛燕という。後に成帝の寵を受けた（『漢書』外戚伝）。ここでは、美しい雛妓。〔鴉黃〕は、黄い粉を額につける化粧。初唐・盧照鄰の「長安古意」（『唐詩選』巻二）に「織織たる初月鴉黃に上る」と。

洛陽の美女趙飛燕

鴉黄を画くことを学ぶも未だ巧妍ならず

同伴を呼び来たつて佳福を誇る

一股の宝釵 三百錢

其二

紫陌香塵紅玉堆 紫陌の香塵紅玉堆し

玄都桃樹一時開 玄都の桃樹一時に開く

芳花滿目定誰有 芳花滿目 定めて誰か有する

得意劉郎鞭馬來 得意の劉郎 馬に鞭つて来る

この詩は、中唐・劉禹錫の七絶「朗州より京に至り、戯れに花を看る諸君に贈る」詩（『唐詩選』卷七）に「紫陌香塵面を払つて来る、人の花を看て回ると道はざる無し。玄都觀裏桃千樹、尽く是れ劉郎去つて後栽う」とあるのを踏まえる。（紫陌）は、都大路。（紅玉）は、ここでは桃の花の形容。

其三

水晶宮裡玉塵生 水晶宮裡 玉塵生ず

馬嚼柳條嘶有聲 馬は柳條を嚼み嘶いて声有り

蛾眉一笑值何幾 蛾眉一笑 値何幾なりや

只換趙家十五城 只だ換ふ趙家の十五城と

（水晶宮）は、（水精宮）ともいい、もと吳王闔閭の建てた宮殿の名（『述異記』）。盛唐・杜甫の「曲江酒に対す」詩（『唐詩選』卷五）に「水晶宮殿転た霏微」とあるが、ここは妓楼をかく称する。結局は連城壁の故事。戦国時代、趙の恵文王が所蔵する和氏の璧を秦の昭王が十五城と交換しようとした（『史記』廉頗伝）。

其四

枉把景光傷錦心 枉げて景光を把つて錦心を傷ましむ

贈君玉佩價千金 君に贈る玉佩 価千金

春風白馬落花路 春風白馬 落花の路

廿四橋頭烟月深 廿四橋頭 烟月深し

（錦心）は、ふつう華麗な詞藻をいうが、ここでは詩人の心。（廿四橋）は、杜牧の「揚州の韓綽判官に寄す」詩に「二十四橋明月

夜、玉人何れの処にか吹簫を教ゆ」とある。

（竹枝）とは、もと中国は巴渝（今の四川省重慶を中心とする一帯）の地の俗謡で、中唐頃から注目されるようになり、ことに劉禹錫さらには白居易がそれに合わせて七絶の詩形で作詞したことでも広く知られ、後に各地の風俗人情やそれを背景とする男女の情愛を詠ずるようになった。このスタイルの詩も江戸後期以降、都市風俗とりわけ花柳街を詠ずるものとして盛行していたのである。先に挙げた奎堂の「香奩十首」は、市河寛齋（寛延二年「一七四九」）文政三年「二八二〇」「北里歌」やその門弟柏木如亭（宝暦十三年「二七六三」）文政二年「二八一九」『吉原詞』などの系譜を継ぎ、竹枝詞と称してさしつかえないもので、儒教倫理を建前とする中国のそれには見られないような遊里での濃密な交情のさまを描出している。

「岐阜竹枝」を始め「高山竹枝」「三国港竹枝」それに「新潟竹枝」などの諸作があるように、森春濤がこの体を得意としていたことは前に触れたが、やはり「花月新誌」の中から竹枝と題した例を挙げると、第七十号（明治十二年四月二十四日）に当時十七歳の槐南の「小西湖竹枝」三首が載せられていて、其一には、

阿郎和月按銀箏 阿郎月に和して銀箏を按じ

儂亦對花吹玉笙 儂も亦た花に對して玉笙を吹く

月影迷離花影亂 月影迷離として花影亂れ

一簾春夢不分明 一簾の春夢 分明ならずとあり、其二には、

不分明處最消魂 分明ならざる処 最も消魂

半是啼痕半酒痕 半は是れ啼痕 半は酒痕

夢醒春人情亦懶 夢醒めて春人 情も亦た懶し

落花時節又黃昏 落花の時節 又た黃昏

と詠じられている。^{注15)}

それに対して、逍遙の「竹枝に擬す」詩は多分に擬唐詩風の觀念的習作的なものに過ぎず、巧緻繊細という点において遜色のあることは否めない。もつとも、實際の逍遙は紅燈の巷に遊んだことはあつても、たんなる遊興好色のためというより、「妓を聘さば須らく快流の人を邀ふべし」(正編「偶成」五首其五)と念じ、義の心に篤く共に語るに足るべき相手を求めてのことであつたが、所詮は「香閣妓を呼ぶも快流無し」(正編「春秋夜感懷」四首其三)という失望落胆を味わつており、したがつて自身の体験に裏打ちされて、こうした艶詩が作られたのではないことも、觀念的なものになつて一因であらうか。^{注16)}

五

これまで見たように、中野逍遙に艶体の作がないわけではないが、まだ漠然と美人を夢みている段階は別として、お茶の水の高等師範学校に通い佐々木信綱の竹柏園で歌を学ぶ南条貞子を恋慕うようになつてからは、その一途な想いの迸りは、香奩体とか竹枝とかという従来の艶詩の枠では括ることができなくなる。というのも、己が恋慕の情をあからさまに訴え吐露することになるからである。

その際、逍遙の詩が「時に極端な和習の語を交えながら、唐詩をふまえた朗朗たる格調で、畳みかけるように激情を歌いあげ、そのすぐれたものは、唐代の異端の詩人、李賀や李商隱を思わせるものがある」(入谷仙介『近代文学としての明治漢詩』第三章、研文出版、一九八九年)のは確かであるにしても、さらに唐詩ばかりではなく

漢代や魏晋の古詩を踏まえた表現がなされることがあつた。

例えば、「我が思ふ所は上毛の人」と始まる「我所思行」四首(外篇)の場合には、明らかに後漢・張衡の「四愁詩」(『文選』卷二十九)を踏まえており、そのことは既に笹淵友一氏はじめ諸家によつて指摘されている。^{注17)}

また、逍遙の代表作とされる五絶「君を思ふ十首」(外編)其七に「君を訪うて台下を過ぐ、清宵琴響揺らぐ。門に佇みて敢へて入らず、月前の調を乱さんことを恐る」とあり、そこには彼の行動がありのままに詠み込まれていると思われるにせよ、詩的表現として形象化する上で、西晋・陸機の「擬古詩」十二首其十(西北に高樓有り)に擬す詩(『文選』卷三十ノ『玉台新詠』卷三)の、

高樓一何峻	高樓一に何ぞ峻なる
迢迢峻而安	迢迢として峻にして安し
綺窓出塵冥	綺窓塵冥より出で
飛陛躡雲端	飛陛雲端を躡む
佳人撫琴瑟	佳人琴瑟を撫つ
纖手清且閑	纖手清くして且つ閑なり
芳氣隨風結	芳氣風に随つて結ぶ
哀響馥若蘭	哀響馥しきこと蘭の若し
玉容誰得顧	玉容誰か顧みるを得ん
傾城在一彈	城を傾くるは一彈に在り
佇立望日昃	佇立して日の昃くを望む
躑躅再三歎	躑躅して再三歎す
不怨佇立久	佇立して久しきことを怨まず
但願歌者歡	但だ歌者の歡びを願ふ
思駕歸鴻羽	歸鴻の羽に駕して

比翼雙飛翰 翼を双飛の翰つばさに比ならべんことを思ふ
 という発想なり表現がその背後にそれとなく影を落としているように感じられる。

さらに、「帯ゆゑ困ゆゑ寛むこと幾尺ぞ、君を思うて瘦する此の如し」と歌い起こし、「彼の可憐あはれ姝を思ふ、彼の可憐あはれ子を思ふ」と結ばれる「長想瘦」(外篇)のなかに、

願ねが托秋天月 願ねがはくは秋天の月に托し

片々訴幽思 片々幽思を訴へん

願ねが借曉空鴈 願ねがはくは曉空の雁を借り

行々寄錦字 行々錦字を寄せむ

願ねが爲黃金環 願ねがはくは黄金の環と為つて

一生付玉指 一生玉指に付さん

願ねが爲綺羅衣 願ねがはくは綺羅の衣と為つて

百年纏紅臂 百年紅臂に纏はん

願ねが爲卷髮梳 願ねがはくは髪を巻く梳くしと為らん

願ねが爲洗膚水 願ねがはくは膚を洗ふ水と為らん

願ねが爲照影鏡 願ねがはくは影を照らす鏡と為らん

願ねが爲分温被 願ねがはくは温を分かつ被と為らん

と恋い焦れる女性への想いを切迫した調子で訴える箇所がある。

いったい、香奩体にかぎらず、それ以前の六朝の宮体詩にしろ、一般に情詩とか艶詩とか呼ばれるものは、おおむね男の作者が女性の姿態を詠じたり、女の恋心を歌うものであっても、直接自身の恋情を激烈に詠ずるものは至って少ないのだが、唯一その例外とも言うべき作品に晋・陶淵明の「閑情の賦」があつて、本来は「情欲を静める」意図で作られているというが、美人への熱烈な思慕の情を歌い上げており、ためにその人品や文学を高く評価したはずの梁・昭

明太子(蕭統)も「白璧の微瑕」としてこれを難じている。逍遙の「長想瘦」の一節は、あるいは『唐詩選』(巻二)に収める初唐・劉廷芝の「公子行」に「願ねがはくは輕羅と作つて細腰に著かん、願ねがはくは明鏡と為つて嬌面を分たん」というのから学んだかも知れないが、その場合にしても「閑情の賦」の「願ねがはくは衣に在りては領あひだと為り、華首の餘芳を承けん」「願ねがはくは裳に在りては帯と為り、窈窕の織身を束ねん」「願ねがはくは髪に在りては沢と為り、玄鬢を頰肩に刷はかん」「願ねがはくは眉に在りては黛と為り、瞻視に随いて以て聞揚せん」「願ねがはくは糸に在りては履と為り、素足に附して以て周旋せん」云々と疊みかける表現なしには成り立たなかつたに違いない。

但し、誤解のないように言うと、ここに示した諸例は、逍遙が意識的にこうした古典に基づいて表現を彫琢し練り上げたものではなく、むしろ激情の迸りとして咄嗟に口を衝いて出た詞が結果としてそれらを踏まえた形になっていると見るべきであろう。

学友宮本正貫が「亡友中野君の遺稿の後に書す」(外編雜録)において「他日、余も亦た君を訪ぬ。君示すに秘蔵を以てす。受けて之を閲すれば、則ち皆古文辞なり。君且つ曰く、韓柳李杜、其の学本源有り。吾れ之を溯らんことを願ふ、と。蓋し君の志す所、文は則ち秦漢を降らず、詩も亦た漢魏を下らず」と証言しているように、そもそも逍遙があるべき詩文の姿としてめざしたのは、文章家の最高峰たる中唐の韓愈・柳宗元、詩人の双璧たる盛唐の李白・杜甫から、さらに遡つてその淵源となつた秦漢以前の文、漢魏までの詩であつた。そのことも大きく与つていたのであろう、漢魏以上の詩と評されていた副島蒼海の詩を高く評価していた。^(註) けだし、逍遙は雄勁悲壯な詠懐述志の文学をよしとしていたのである。

しかしながら、かかる文学観を有していたからといって、逍遙が実際に漢魏や盛唐の詩以外のものを排斥しておらぬのは勿論、一方で才子佳人の綺談情話に心を寄せ、『情史』や『燕山外史』を愛読して、そのなかの登場人物を詩中に詠み込んでいるし、さらに当時流行していた清の張船山(張船山)を読み、また陳碧城(陳碧城)についても「十年の哀句白居易、百代の痛詞陳碧城」(外編「明治廿七年一月、熱海の客舎にて疴を養ふ。傷春十律」其三)と詠じている。ただあくまで逍遙の場合、才子佳人の故事を借りるにしろ、それは恋慕の情をひたすら真率に吐露するためであって、要するに胸臆に滾る己が思い、すなわち彼の好んだ詞で言えば(紅心)を吐き出すことにほかならなかった。現実の厚い壁にぶつかって悲憤慷慨し、先に挙げた「明治の漢詩壇」からそのまま引用すれば「花を見て泣き、鳥を聞きて泣き、佳人に對して泣き、國家に對して亦泣く」という文字通り悲鳴絶叫となってあらわれたのである。またそこに松本奎堂や山田護堂の名が挙げられていたのも、前田愛氏(前田愛氏)の「琴」の主題すなわち恋慕の情と(劍)の主題すなわち国士的な慷慨とが不可分のものとして『逍遙遺稿』中に詠じられていることによる。さればこそ大町桂月や田岡嶺雲ら同世代の青年の熱い共感や支持を得たのであるう。

以上、中野逍遙と香奩体との関係について見てきたが、最後に改めて私見を述べれば、晩唐・韓偓の『香奩集』そのものからというよりも、当時流行していた香奩体などの艶詩の影響が初期の作に見られることは否定できないものの、さりとてそれを逍遙詩の本色とみなすことはできず、笹淵友一(笹淵友一)氏が「比較的初期の彼には香奩体の詩の感化も全くないとはいへない」とされているのが妥当な見方であろうと思われる。

注

(1) 明治二十九年六月刊の「青年文」第三巻第五号「時文」欄「今日の漢詩人」(西田勝編『田岡嶺雲全集』第二巻にも所収、法政大学出版部、一九八七年刊)。ところで、前年十二月刊の同誌第二巻第五号「時文」欄には、中野逍遙を悼んだ「惜しき青年詩人」と題する記事が見える。無署名ながら、これも嶺雲の筆になるものである。但し、『田岡嶺雲全集』には未収録。なお、「青年文」には不二出版の復刻版(二〇〇三年)がある。

逍遙の槐南・寧齋に対する批判については、拙稿『逍遙遺稿』札記―高橋白山・月山父子のこと他―(『椋山女学園大学研究論集』第三十号 人文科学篇、一九九九年)において言及した。

(2) 当初の編輯委員は、塩井正男(雨江)・狩野直喜(君山)・高山林次郎(樗牛)・島文次郎(華水)・岡田正美・内海弘蔵(月杖)・上田敏(柳村)であったが、第四号の役員変更の記事によれば、大町芳衛(桂月)・武島又次郎(羽衣)・佐々政一(醒雪)・畔柳都太郎(芥舟)・岡田正美・上田敏・藤岡勝二に替わっている。

ちなみに、三浦叶『明治漢文學史』(汲古書院、一九九八年)「下篇第六章第一節『帝國文學』と漢文學」には「桂月・天隨あたりの筆であろうか」としているが、筑摩『明治文學全集41』収載の年譜に拠れば、天隨久保得二は明治八年生まれで、帝国大学に入学したのが明治二十九年七月であるから、時期的に合わない。

なお、桂月は明治三十年一月の「帝國文學」第三巻第一号に載せた「晴瀾焚詩を讀む」の中でも「支那の詩人は、山川花月を吟するに切にして、粉黛娥眉を詠ずるを憚る。短刀直入的に之を言えば、即ち戀愛の詩を賦せざる也。嗚呼これ豈に詩人の情ならんや」と前置した上で、「中野逍遙は、天真爛漫たる詩人なりき。彼は戀愛を賦するを憚らざりき。われは、頗る漢詩人として之を多とす」(園批点は省略)として逍遙に言及している。

- (3) 丹羽花南については、斎田作樂編著『花南丹羽賢付花南小稿』(太平書屋、一九九一年)参照。
- (4) 『奎堂遺稿』では巻下己未の什に載せ、安政六年の作とするが、森銑三『松本奎堂』(『森銑三著作集』第六巻、中央公論社、一九七一年)に従う。
- (5) 簡野道明『和漢名詩類選評釈』(明治書院、初版は大正三年)及び猪口篤志『日本漢詩上』(明治書院、新釈漢文大系、一九七二年)にこの詩を載せるのを参照。後者には虻堂の小伝が附されている。
- (6) 安藤英男『新稿雲井龍雄全傳上巻本篇』(光風社出版、一九八一年)参照。また宮島誠一郎については、由井正臣編『幕末維新期の情報活動と政治構想―宮島誠一郎研究―』(粹出版社、二〇〇四年)があり、金子宏二編「宮島誠一郎年譜」が附載されている。なお餘談ながら、明治三年に反政府活動の嫌疑をかけられ、その年の十二月小塚原で斬首された雲井龍雄については、十六年七月に墓碑が谷中の天王寺に建立されたが、十四年五月に撰せられたその碑文「龍雄雲井君之墓表」は、ともに安井息軒の三計塾で学んだ人見寧の作になるもので、それを浄書したのが清人張滋助であった。ここで張滋助が一役買っているのは、米沢出身で雲井龍雄に兄事したところのある曾根俊虎との関係によるものであろうか。
- (7) 和刻本に、館機(柳湾)・巻大任(菱湖)校の文化七年(二八一)〇跋『韓内翰香奩集』三巻があり、汲古書院刊『和刻本漢詩集成唐詩10』に影印を収める。
- (8) これらの見方は、あるいは日夏耿之介が『明治大正詩史』巻上(新潮社、昭和四年)第一編第三章第五節「古詩型の新詩才」において、逍遙の「君を思ふ」十首を挙げて、「ひととき漢詩壇に時花つた韓偓が香奩詩の艶體、鄭谷の柔媚、飛卿が穠麗等の感化もあつたらうが、また、尙傳統の臭味を脱離し切らずに終つたけれど、この小篇のみを看ても、彼の詩情の卓越は、争はれない」と評しているのに拠っているのかも知れない。
- (9) 杉下元明校注『逍遙遺稿』(抄)(『新日本古典文学大系明治編2漢詩文』収録、岩波書店、二〇〇四年)には、「君を思ふ十首」其八の「忽ち発く屋頭の桃、君に似たり三両菜」が、韓偓「中春憶ひて贈る」詩(『韓内翰香奩集』巻三)の「君に似たる花は発く両三枝」に基づくことを指摘している。
- (10) 明治十年一月、朝野新聞社主の成島柳北によって創刊され、十七年十月、柳北の死とともに第百五十五号をもって廃刊となった。ゆまに書房の復刻版(一九八四年)がある。
- (11) 芥川の云う「手を詠ず」と題する作(『韓内翰香奩集』巻二)は、次のごとくである。
- | | |
|---------|-----------------|
| 腕白膚紅玉筍芽 | 腕白く膚紅なり玉筍の芽 |
| 調琴抽線露尖斜 | 琴を調へ線を抽きて尖斜を露はす |
| 背人細撚垂臙鬢 | 人に背きて細に撚る臙に垂るる鬢 |
| 向鏡輕勻襯臉霞 | 鏡に向ひて軽く勻す臉に襯する霞 |
| 悵望昔逢襄繡幔 | 悵望す昔繡幔を襄けるに逢ひ |
| 依稀曾見托金車 | 依稀たり曾て金車に托するを見る |
| 後園笑向同行者 | 後園笑つて同行の者に向ひ |
| 摘得靡蕪又折花 | 靡蕪を摘み得て又た花を折る |
- 〈玉筍芽〉(尖斜)は、女性の手指の形容。〈臙〉は、臙脂。〈勻〉は、手でととのえる。〈襯臉霞〉は、臉に施した化粧。〈金車〉は、華美な車。〈靡蕪〉は、せりに似た香草。
- (12) 揖斐高「明治漢詩の出發―森春濤試論」(『江戸文学』21、一九九九年)に拠れば、湖山の詩は「春濤のこの種の艶體詩を一見推称しているようであるが」、その実「髻を蓄えた偉丈夫の容貌にも似ず、いつまでも艶治佳麗な竹枝詞や香奩體の詩に手を染めていることを揶揄した」という。入谷仙介「森春濤小論」(『新日本古典文学大系明治編2漢詩文』解説、岩波書店、二〇〇四年)も、その見解を踏襲する。
- (13) ちなみに、明治十八年(二八八五)十一月発行の「新新文詩」第

六集に附載された「詩問」欄に「唐人無題ノ詩多ク闒闕婉嬾ノ情ヲ述アルニ似タリ是レ即チ所謂香奩體カ」という質問に対して、槐南は「然ラズ無題ノ作ハ李義山ニ創マリ香奩ノ什ハ韓致光ニ起ル此兩體自カラ判セリ混ジテ一トス可カラズ今人少コシク語ノ綺艷ニ渉ルヲ見レバ則チ目スルニ香奩體ヲ以テス是レ大ニ誤レリ義山言ハズヤ楚兩含情俱有託ト是レ即チ其無題ノ什ノ大宗旨ニシテ其言必ズシモ盡ク情懷ヲ寫サズ譬ヘバ離騷ノ芳草ニ託シテ以テ王孫ヲ怨ミ美人ヲ借テ以テ君子ニ喻フルガ如ク其文ハ則チ纏綿淒楚ト雖其意ハ實ニ忠臣孝子ノ肺肝ニ出ヅ無題ノ深婉味ヲ可キ此ニアリ香奩ニ至テハ則チ専ラ柔賦ヲ主トシ間情風懷亦皆ナ浪子蕩婦尤雲殢雨ノ實事ニアラザルハ無シ其鄙褻卑ム可キ此ノ如シ其趣旨ノ界スル鴻溝ノ如キコト即テ見ル可キナリ」と答えて、寄託するところのある無題詩と専ら柔賦を主とする香奩体とは別物だとしている。

- (14) 揖斐高「竹枝の時代——江戸後期の風俗詩——」（季刊日本思想史）第二十一号、一九八三年。後に汲古書院刊『江戸詩歌論』収録、一九九八年）参照。

ちなみに、わが国における竹枝詞の代表作を集めたものに昭和十四年刊の伊藤信編『日本竹枝詞集』三卷（岐阜華陽堂刊）がある。中国では近年、雷夢水・潘超・孫忠銓・鍾山編『中華竹枝詞』全六冊（北京古籍出版社、一九九七年）、王利器・王慎之・王子今輯『歷代竹枝詞』全五冊（陝西人民出版社、二〇〇三年）が刊行され、前者は地域別（省別）に唐代から民国初までの二万一千六百餘首を配列し、後者は時代順に清末までの二万五千餘首を収録する。

- (15) この詩は、『槐南集』には収められていない。なお、槐南の艶詩については、福井辰彦「森槐南と陳碧城・槐南青少年期の清詩受容について」（『国語国文』第七十二巻第八号、二〇〇三年）参照。
- (16) 原田憲雄「方向」第一二六号（一九九一年三月）から第一三一号（一九九一年六月）にかけて、逍遙が春夢女史と称した坪井すむが、彼の歿後数年のうちに書いたと思われる小説「誰が罪」全十回

の翻刻を掲載されており、そこに自身は藤井倭文子、逍遙は岡野一郎という名で登場しているが、その第六回（「方向」第一二九号）に「倭文子は初の程こそ岡野を嫌ふとは有らねど逢ふを厭ひもしつれ終には肉親の者も及ばぬ彼が親切に感じ真の兄とも頼もしき友とも思ひて彼をいつしか慕ふ様になりけり此は最初の倭文子に比ぶれば聊か岡野が心を慰めしも充分満足を与ふる事能はざりきされどその中には自然と心解け我が望むか如くならんと彼は親が子の成人を樂むが如くに樂めり此の樂み有る為此の意中の佳人有る為友人に誘はれ交際上花柳の巷を踏む事あるも決して汚れたる花を手折らんとは思はず」という一節が見える。どこまで事実を踏まえているか、よくわからない点はあるものの、逍遙が純粹でストイックな心情の持ち主であったのは確かなようである。

- (17) 笹淵友一「『文學界』とその時代下」（明治書院、一九六〇年）。その後、前田愛「中野逍遙」（『近代日本の文学空間』新曜社、一九八三年および『前田愛著作集』第四巻、筑摩書房、一九八八年）に収録。原題は「明治の漢詩」（講座日本現代詩史——明治期）右文書院、一九七三年）において、東海散士「佳人之奇遇」（巻四）の「我所思行」を下敷きに行っていることを明らかにされた。なお、この詩は杉下元明校注『逍遙遺稿』（抄）にも収録されている。

- (18) ちなみに、宮本正貫は明治二十八年九月に富山房から『東洋歴史』上下二巻を刊行しており、その「東洋歴史叙」に漢学科同期で正科の逍遙や西谷虎二、選科の小柳可氣太・田岡嶺雲の名が見えるので、ついでにその一節を示しておく。坪井博士は、坪井九馬三。而シテ余ハ西谷虎二、中埜重太郎兩君ト共ニ我カ大學興テヨリ始メテ漢學科ノ業ヲ卒ヘタリ實ニ明治廿七年ノ夏ナリ偶々日韓清事アリ是ニ於テカ相約スルニ東洋史ノ著ヲ以テス而シテ悲イカナ中埜君ハ逝キ西谷君ハ去レリ余モ亦病アリ乃チ更ニ學友小柳可氣太、田岡佐代治兩君ニ托シ更ニ坪井博士ノ校閱ヲ受ケテ此書ヲ成ス是レ茲ニ特書シテ謝スル所以ナリ

(19) 「豆州漫筆」(正篇)及び「新春書感、信州高橋月山子に寄す、長篇一首」(外篇)。

(20) 拙稿『逍遙遺稿』札記「才子佳人小説との関わりをめぐる」——(椋山女学園大学研究論集)第十八号第二部、一九八七年)参照。杉下元明校注『逍遙遺稿』(抄)には『燕山外史』を踏まえた表現について丹念に指摘されている。

(21) 明治期における張船山詩の流行受容ぶりを具体的に論じたものとして、福井辰彦「宮崎晴瀾と張船山——明治漢詩における清詩受容の一斑」(『国語国文』第七十一巻第四号、二〇〇二年)があり、拙稿『逍遙遺稿』札記「張船山のこと他」——(椋山女学園大学研究論集)第二十九号人文科学篇、一九九八年)でも中野逍遙・正岡子規・与謝野鉄幹の三人について、その受容のありようを述べた。なお、杉下元明校注『逍遙遺稿』(抄)には張船山詩に基づいた表現についても注記がなされている。

(22) わが国では、文久元年「一八六一」刊の桜井監編『陳碧城絶句』二巻を始めとして、明治十一年刊「一八七八」の森春濤編『清三家絶句』三巻(巖谷一六、小野湖山序)、および明治十二年刊の市村水香編『頤道堂詩鈔』四巻がある。これらは、いずれも七言絶句を集めたものである。また明治十一年刊の冬野中島一男編集『清二十四家絶句』(川田甕江序、依田学海跋)には、永坂石埭の選による陳碧城詩十九首を収む。なお、『清三家絶句』の第三冊、郭頻伽の巻末に附された「茉莉巷売詩店発行書目」に近刊として挙げられている中に森春濤鈔本『陳碧城香奩詩』三冊及び『碧城仙館女弟子詩選』三冊が見えるが、実際に刊行されたか、未確認。前者は『頤道堂外集』十三巻のうち巻六く巻九が香奩の部となっているのから選んだものであろうか。また後者に関して、明治十一年三月刊の「新文詩」第三十三集に小野湖山の「碧城仙館女弟子詩選序」を載せる。ちなみに陳碧城の事跡は、合山究「陳文述の文学と逸事と女弟子」(九州大学「文学論輯」第三十三号、一九八七年)に詳しい。

ところで、白居易の「千年の哀句」が「長恨歌」を指しているのは間違いないが、陳碧城の「百代の痛詞」が具体的にどういう詩を言うのかは、これだけでははつきりしない。ただ、森槐南が明治十七年作の「陳雲伯が頤道集を読む」詩(『槐南集』巻三)の評において、「七古長篇、一に貞烈を表章し忠孝を激揚するを以て主と為す。明末の諸忠尤も詳し。盧忠烈の墓の如きは、沈鬱悲愴、字字淋漓、自ら謂ひて集中の第一と為す。真に愧ぢず矣。餘に沈雲英の墓、秦良玉屯兵処等、皆明季の奇女子を詠する者、詞意哀婉、音旨蒼涼、純乎として梅村の蹊徑なり」と述べていることは興味深く、逍遙の場合も槐南が挙げているような「明季の奇女子」を詠じた七言古詩が念頭にあったのかも知れない。さらに馮小青を始めとする三女土の墓を修したことを詠ずる「西湖三女土墓詩」(『頤道集詩選』巻二十二)なども意識にあったか。なお、森槐南における陳碧城詩の受容については、前掲、福井論文に精細に論じられている。

(23) 前掲、前田愛「中野逍遙」。

(24) 前掲、笹淵友一「『文学界』とその時代下」。

[前稿訂正]

拙稿『逍遙遺稿』札記「張滋昉補遺」——(椋山女学園大学研究論集)第三十五号人文科学篇、二〇〇四年)には、次のような誤記の箇所があったので、茲に訂正しておく。村山吉廣氏から御指摘をいただいた。

(誤) (正)

一七頁下段二十二行 Legs → Legge

二六頁上段二十一行 ↓慨ね錢に吝也 ↓↓慨ね錢に吝也

(二〇〇四・九・二七稿)
(二〇〇五・一・四補筆)

* 文化情報学部 文化情報学科